高尾丸劔之稲妻

京山

へ13
2378
21

文化七年

遠
2378
21

錦詞玉韻

李子年来窮不怕慣操弱
翰與天攻佳人奪取歸寸
士淚眼能教寥笑容非是
文心多倔强祇因老耳欠
龍鐘從今懶聽不平事怕
惹間愁上筆鋒　右笠翁
十種曲中意中緣巻末作
庚午春日　山東京山

花子種
於この兄
喧嘩買
キ角

縮師宣図
國貞筆

嘗自佳人
玄苔碑千
載經相尋
見楓樹今
日為誰青
見テ洞房語園

○蒲冠者範頼

○化粧坂之遊君高尾

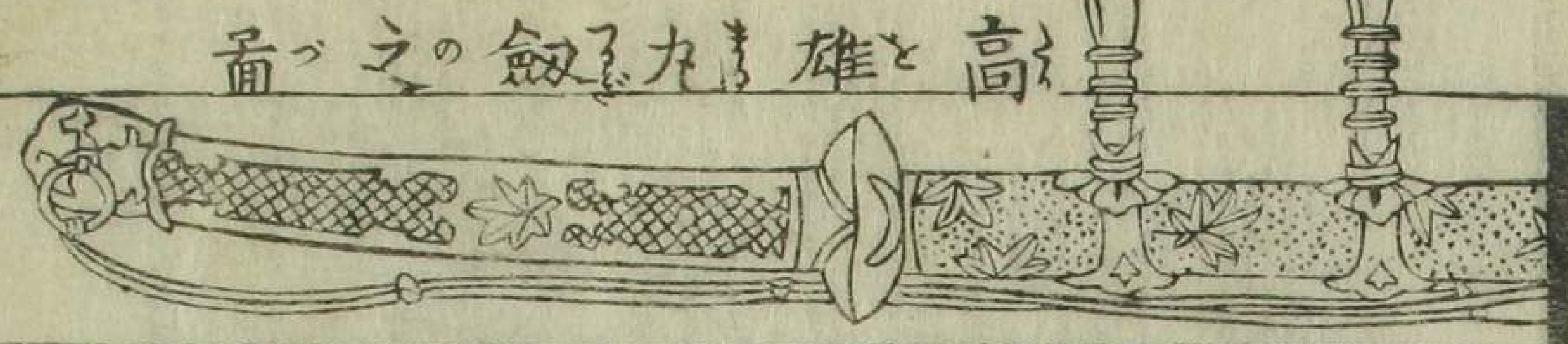
○範頼の嬶男　月若丸
○乳母優岡
○浮世渡平
○絹川谷蔵

蒲冠者範頼之重器

○高雄丸剱之来由

盛衰記を案ずるに文学上人そのむかしの名は遠藤武者盛遠とて遠藤
盛光が一男たりしに母なくして父母にわかれ遠光がやしなはれて
十六才にして上西門院の北面にめされ十八才にして出家なしぬその道心の
おこりをたづぬるに渡辺橋供養ありけるとき其並の里にすむ源左衛門渡
といふものゝ妻袈裟御前を見そめしよりかりにも無常をくはんぜさする
盛遠なれども袈裟がたぐひなきにわけられ心とみだれやましける袈裟ごぜんの母は
衣川といひて盛遠がためにはけんざいの叔母なりしかども盛遠いろよにおぼれて
親属のはじをもかへりみずおぼの衣川をせめていひかゝりければけさごぜんは母ひ
とごとなりとおもひさだめしれんぼの心さてめぐらしおん身源左衛門がつまとなりて
けさごぜんをわがつまにむかへたまふべくばおん身をころして我のぞみをと
おもひけるにぞ衣川はこゝろにかなひけさごぜんをまねきて盛遠がつましとなりて
あるものとさいはひぞんとなるにけさごぜん母がためにはさりがたく
その衣川のことをきて盛遠とひとよのちぎりをむすびてかきぬくのわけをせ
のもとに盛遠けさごぜんとまのあたりちぎりたれべけさごぜんはひけるやうにわが
おんみと二世のちぎりをなさんとおもふならばけふは源ざへもんどのがとこにいりてねむらん
ずるに今宵はわがもとにきたりてそのかみをあらへせさけにゑひしてふし
たまふなれば

高雄丸剱之図



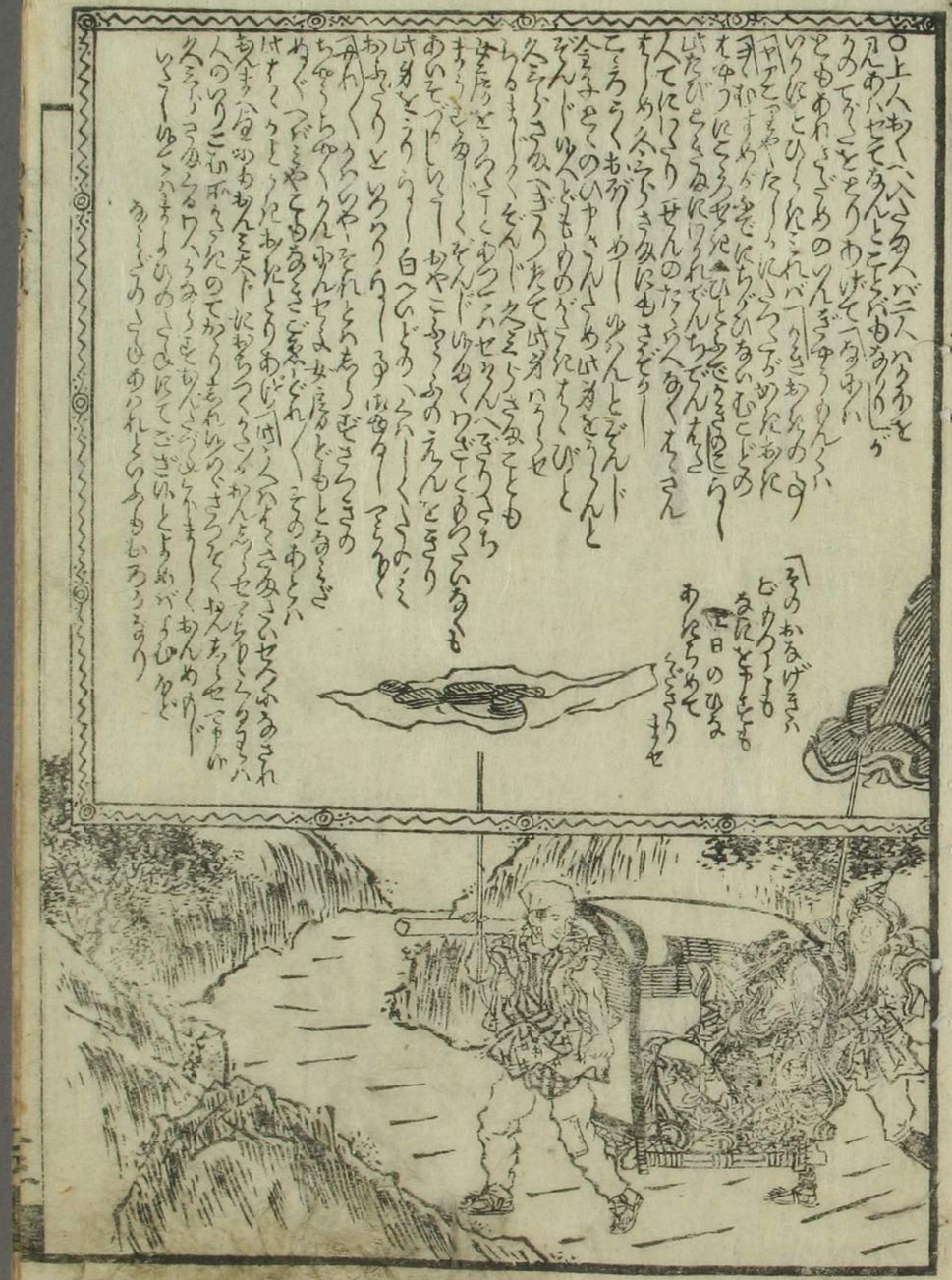
ぬれたる髪のぬれたるをさぐりあてよく首をかききりてぞかへりける袈裟
ごぜんは源左衛門がつまとなりて三とせのあひだそひなれけるが月日をへ
ておもひをたえず盛遠にこゝろをうつさるゝにいたりしはあはれといふも
さらなり盛遠はよろこびいさみけるにその日髪をあらひていねたり
ひとゝせのなさけをわすれずして源左衛門に酒をすゝめて…
ころにてよそへのびきたりてそのかみをあらひてかの夜はけさごぜんのふし
たるところへしのびいりて男のさまにこしらへたりしかば盛遠はさきにけさ
源左衛門とこそ思ひてけさごぜんとはしらずかいなきものを討とりて
かへりたるにその首をみればけさなりければ盛遠は大きにおどろき
ひとりつくづくとおもふにまことにけさごぜんはわがためにいのちをすてたり
むかしも何ぞかゝるためしあるべきとやがて髪をきりて世をのがれける
今にいたるまでその名をとゞめて世の人文覚上人とよべり
たゞいさぎよかりけれどこそありがたけれとて源左衛門も出家して
さんげし両人ともに道心をおこしてけさの菩提をとむらひ源左衛門は渡阿弥陀仏と
いふ盛遠は文覚と名のり二人ともに諸国の霊場をめぐりて
けさごぜんのぼだいをとむらひけるとぞ

○以上盛衰記の説なり

文学
賀裝ごぜん

傳笑草

いるつまよ
十三



大磯の遊君
高尾
粧を凝す

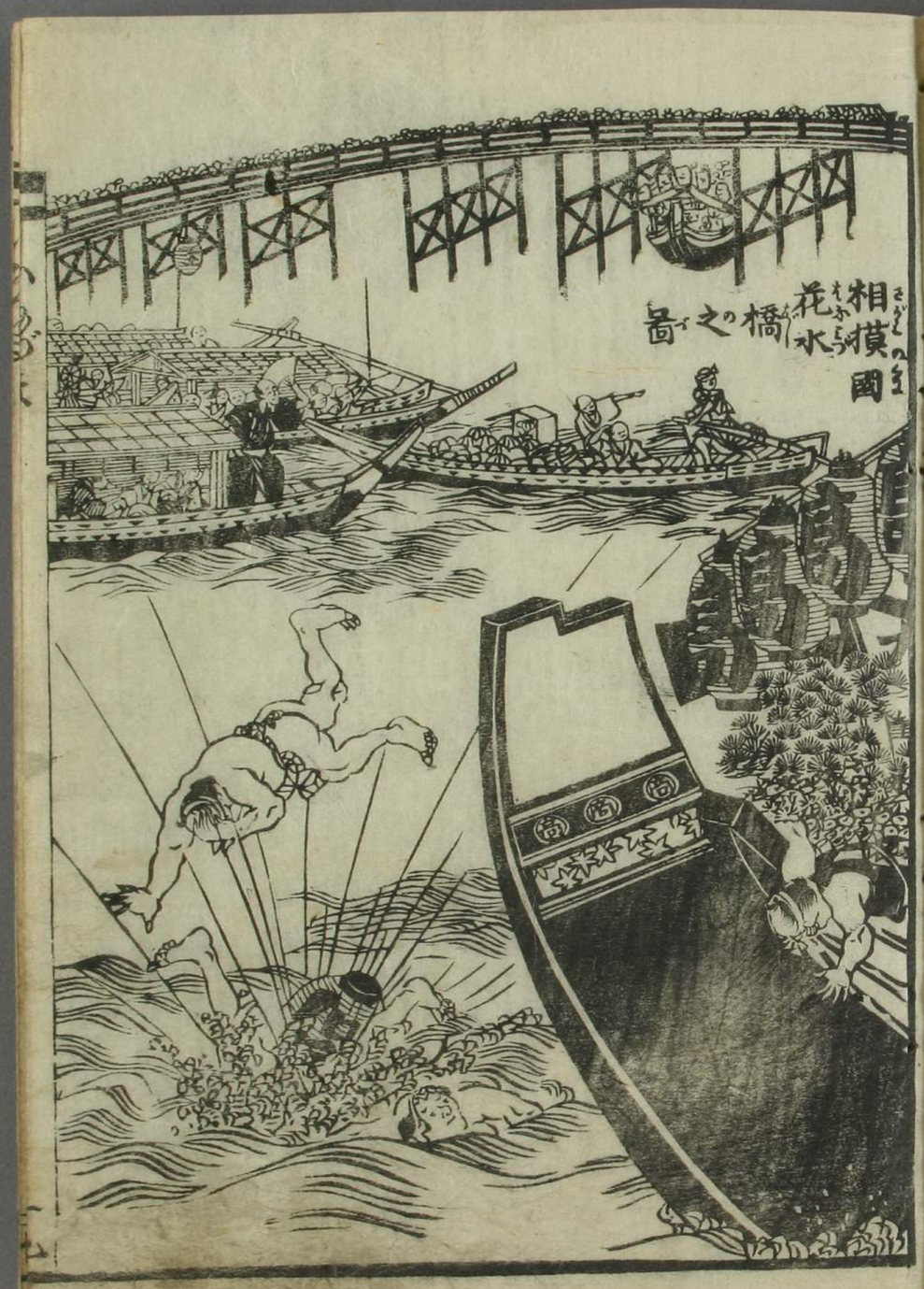
京園屋

作者口上

山東京山作
歌川國貞画

ふとんのうへに
さぶひろう
ふるをいたせに
おそいぞと
あのきをひきに
ゆうしとろう
そうだいてう
まらいのよ
かんしたの
ゆめのたてろそ
とかにそれぐ
とりあやうを
うろうひつて
よひきえる
ゆくとうの
くるをかも
やてうろか
ようふのれて
ゐたまひこみ
ちひがけゐた
うえのひやうふ
あしくしく
ひたのけて
くるをかにち
つひちさうん
ちんそうそも
でんがよんとう
ぬたのかちて
のうよりをを
こうまをろう

いろそこまひん
見のびして冊を
久そうぞの
まうせこうん
二人ろーよに
ちんろうこうけや
ぞうろこうも
ひるひーろ
ちたーー
ちあんは
ゐれけるが
ゐやくこうん
てもて
うちりう
さがごと
ひんて
たが」ぐり
りこれきろみ
ゐるゐうびまうと
あふことも
まうくれど
こふどやくと
多づろひ
和いのーこー
こりきえかへ
ちくと目がけて
ゐをゆたくう
かくとふまうを
のうよりこうんと
まろーゆるひけやつの
こんこうろうぬ
ふるまひどゃ
ナア

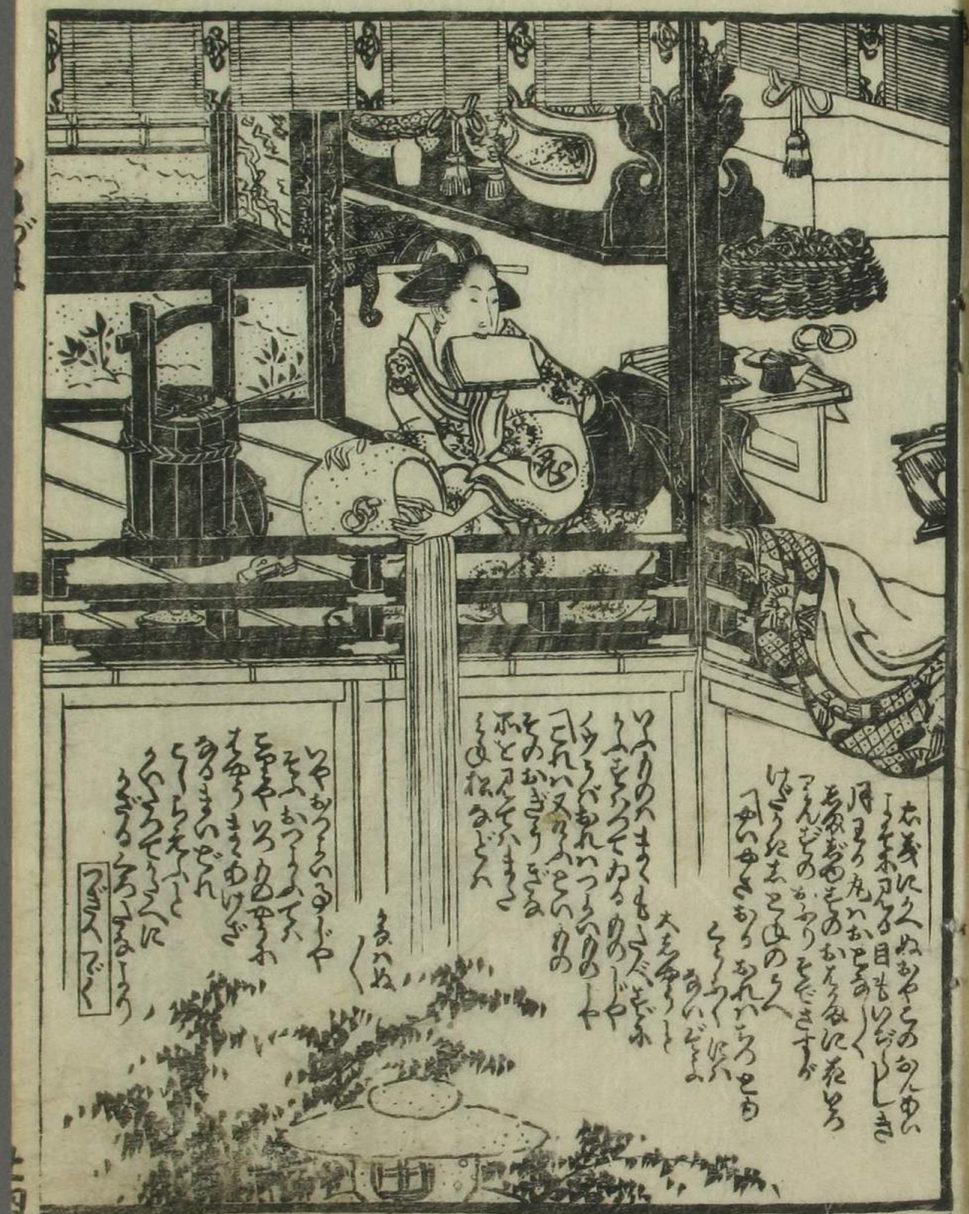

相模國
花水橋之圖

いろそこうのん
凡のだして冊者

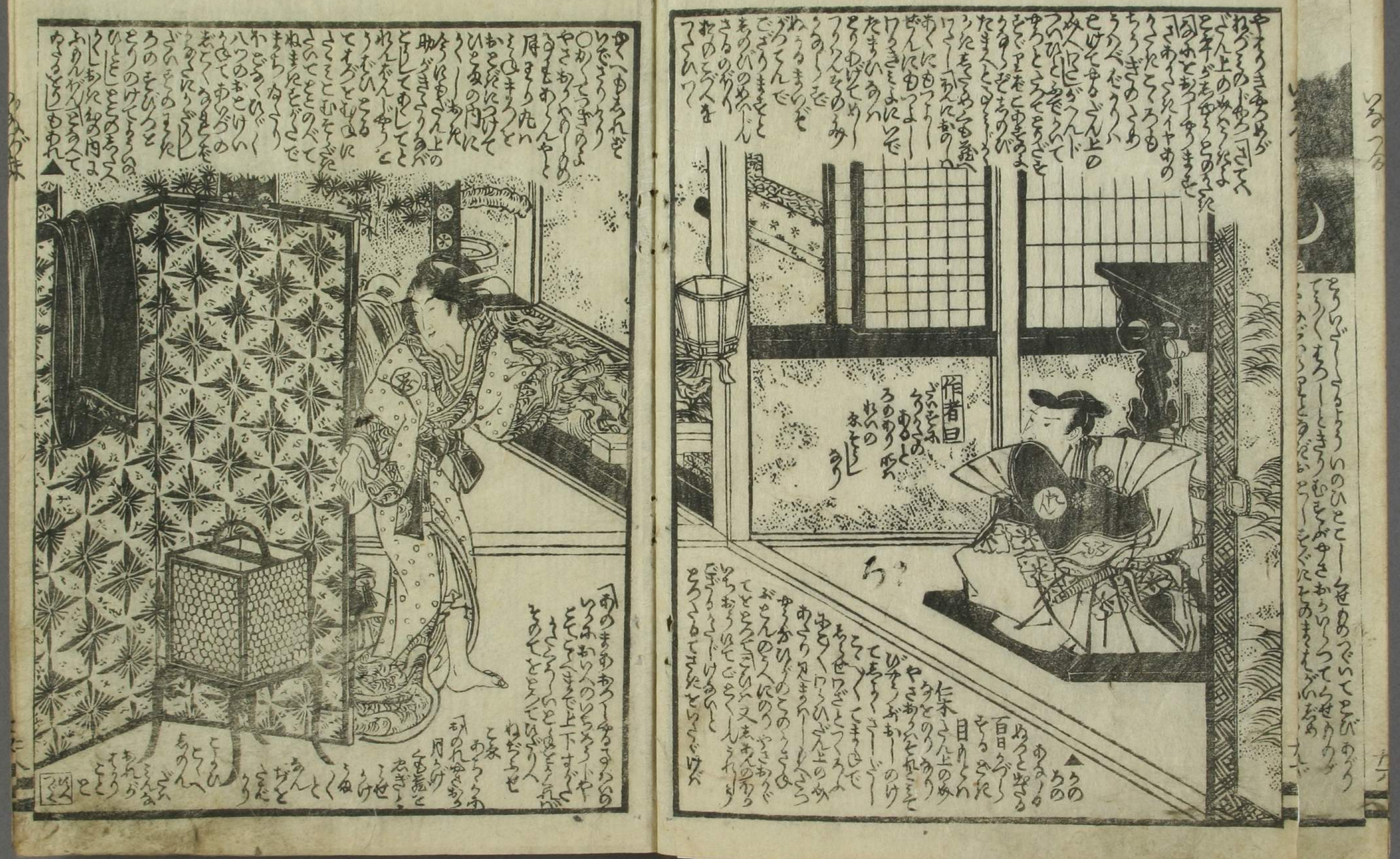
註文さし

ふびんやく

五のちんへぐく



作者曰


作者曰

「ざん上のみけところく
もものぶくくん
とてもくるいね
百れんりん
ぎざさを
ゆりて
そのれん
だんへ
そろそん
そろろ
いやごと
あり
せへ
月りを
いま
ざ
そ

「そんとん
そろど
うりくと
ものゾせさり
りんげ
あやまり
そそぜいも
きいるあ上ま
ゆろと
ナア
「そろそん
そろど
いやごと
ゆア
こる松を
一ちざぞ
「ろそん
そろど
ものゾせさり
りんげ
あやまり
そそぜいも
きいるあ上ま
ゆろと
ナア

作者長うきと
ちなて日
山石
大ぶた

漢楚賽擬選軍談初編 山亭馬琴作 歌川國安画 代表入合本上下各二冊

あの冊子の唐山漢楚の闘戦を頼朝義仲両雄の爭執に撮合くいとかりろ繰くうえ抑唐山の舊事へ媛刀称速水鮮易くもに貞定假名の目ふ熟行ひくいをを和ゝ漢楚奥ヒの趣ふ做今とのいとゃ人物地名へ皇國の故事ゆくふくふふまとと巳ょう巻をひくと紀ふを揮くいとあるもこまぞよ風わくんくあるる作まり

おかめぐく第三編 同作 同画 全八号 合本四冊

代表入上下各二冊 賛二へんも丑の早春新板 子の年内ゝ後要ーヤ

擬太平記演義三國志初編 山亭馬琴作 全八号 合本四冊

代表入上本年ふ梓をつぎて数編の大部ふいさへ亦遠くもつきて刊行せまくやりもとりて且その書名を掲ゲーく四方の出ひき方ふ報ぜてまりふ

雅俗用文 神田蓑笠翁 深川丈蚫堂 作文 書 中本 全一冊

あの書へ中ふまく雅言雅言を解 見きるふ奥まこの字義出処注ゝ行微ふきを文集春の雅来ふ差

ると巳の世ふわり紙の用文書ト貸俗字のミ字をとふ俗伊ふ雅文ふり雅ふ俗用ふ兼ゝうまの間の自ふ一ふ書ふ君ふ巳ふ

書林 地本問屋 江戸馬喰町二丁目 永寿堂西村屋與八板